



アルコール依存症治療に携わる さまざまな職種とその役割

5

アルコール依存症治療における心理職の役割と貢献

The role and contribution of clinical psychologists in the treatment of alcoholism



医療法人秀山会 白峰クリニック
公認心理師/臨床心理士

河西 有奈
Arina Kasai

Summary

本稿では、アルコール依存症における心理職の役割と貢献について、①個別の心理療法・カウンセリング、②心理職の専門性を生かす集団療法、③心理検査・心理アセスメントと多くの心理職が担う中心業務を概説する。さらに、それらの専門性を生かせるケースとして、アルコール関連問題に加えて心理社会的問題を抱えているケース、過去にトラウマがあるケース、発達障害や人格障害などを合併し対人関係やコミュニケーションに困難さがあるケースを挙げ、かかわりのポイントにも触れた。以前はアルコール依存症治療にかかわる心理職は少なかったが、近年、公認心理師として国家資格にもなり、心理職内で依存症への関心はかなり高まっている。今後、心理職が活用される機会がさらに増えていくことを心から願っている。



Key Words

アルコール依存症, 心理社会的治療, 心理療法, 集団療法, 心理検査

はじめに

「アルコール依存症治療に携わるさまざまな職種とその役割」という特集に公認心理師・臨床心理士（以下、心理職）のセクションを設けてもらったことは、筆者が依存症専門クリニックに勤め始めた二十数年前のことを思うと、大変感慨深いものがある。当時、アルコール依存症医療に携わる心理職は非常に少なかった。「心理職の専門性」という言葉を前面に出す機会はあまりなく、また、アルコールの研修会では心理コースがないため他職種向けのコースに入れてもらうこともあった。

アルコール依存症医療になぜ心理職がかかわることが少なかったのか？ その臨床的背景にあるものの1つとして、「心理療法はアルコール依存症治療には適

応外」といわれてきた歴史がある。そこには「断酒以外の取り組みは、断酒への否認につながり、治療の阻害要因となるので扱うべきではない」というセオリーがあった。狭義の心理療法のイメージ、すなわち、内面を扱う、洞察、深層心理などは、深い内省→掘り起こし→自己理解→葛藤をもち帰り→スリップ（再飲酒）というリスクがあるといわれた。一方で、心理職サイドでも、アルコール依存症は心理療法の対象外という声が主流だった。それはアルコール依存症を心理学的な問題との関連でとらえる理論や技法が少なかったということのほか、心理職の専門性をアルコール依存症関連問題（DVなど家族の問題や就労の問題、高齢者、女性などがもつ特有の問題）への対応に生かす視点が心理職全体に足りなかったこともあるのかもしれない。